認定特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ会誌

Tancho

2025年8月

第54・55号合併

畑で餌をとる親子からLAND ETHICを考える

理事長　　百瀬邦和

私がツルと向き合うようになったきっかけは、縁あってアメリカの国際ツル財団(ICF)で半年間過ごしたことに始まります。G.Archibald博士が友人だったR.Sauey氏と共にWisconsin州BaraboにICFを設立しました。現在、Archibald博士は理事としてタンチョウ保護研究グループの活動に参加してくださっています。彼がICFの活動拠点をBaraboに選んだ理由の一つは、彼が傾倒していたA.Leopoldの活動現場に近いことがあります。ICFに滞在中に私はLeopold記念保護区に何度も通いました。この保護区はLeopoldの名著Sand County Almanacの舞台で、博士のお嬢さんであるN.L.Bradry夫妻が管理していました。そしてA.Leopoldの提唱したLAND ETHIC(土地倫理)につながる野外セミナーが毎週開かれていました。

LeopoldはLAND ETHICについて「ヒトという種の役割を、土地という共同体の征服者から、単なる一構成員、一市民へと変えるのである。これは仲間の構成員に対する尊敬の念の表れであると同時に、自分の所属している共同体への尊敬の念の表れでもある。(新島義昭 訳. 「野生のうたが聞こえる」より)」と表現しています。また同書の中で「この共同体という概念の枠を、土地、水、植物、動物、つまりはこれらを総称した「土地」にまで拡大した場合の倫理をさす」と説明しています。

Leopold は同書の中でツルについてその種としての歴史を踏まえて、「人間が手のほどこしようのない過去、鳥や人間の背後にあって影響を及ぼしている幾千年という信じられない時の流れの象徴である」(同書より)と表現しています。私がこれまでツルと向き合ってきた歴史は、ツルを通してLAND ETHICという考え方に向き合ってきたと言えるのかも知れません。今私たちは、私たちの生活基盤でもある北海道の農地で餌を探しているタンチョウからLAND ETHICについて思いを巡らす機会を与えられているのでしょうか。地球で生きている先輩であるツルから学び、それをどう活かしていくか、それについての私たちの姿勢の重さをいま切実に感じています。

巻頭言　・・・１
2024年度　活動報告　・・・２
サロベツの429の情報　・・・４
イッキュウさんの生涯　・・５
本の紹介　・・・８
＜連載＞
鳥と自然と人 最終回　・・・９
＜活動記録＞　・・・９

タンチョウ保護研究グループ2024年度　活動報告

Activity report for RCC in FY2024

★調査研究活動

＜タンチョウ生息状況調査＞

・繁殖状況調査

4月18-19日、22-23日十勝地方において、セスナ機による飛行調査とドローンを併用した追加の地上調査を行いました。調査範囲は広尾町豊似川から十勝川までの河川及び太平洋沿岸湖沼群です。このうち十勝川流域は北海道開発局池田河川事務所の事業の一部を株式会社北開水工コンサルタントから受注されて行っています。

調査前後の地上調査等の情報を含めた営巣数は105、さらに標識調査の事前調査で確認された巣を加えると十勝地方の繁殖つがい数は112となり、前年とほぼ変わりませんでした。

・総数調査

2025年1月11日に釧路市内の「わっと」で総数調査の勉強会を実施しました。総数調査は1月17日-31日に行い、さらにこの期間の前後に補足調査を行いました。調査地は日程順に、音別・白糠、阿寒(2日間)、十勝東部・日高西部、十勝西南部・日高東部、中茶安別、標茶、鶴居(2日間)、浜中・根室南部、浜中・根室中部、根室北部・網走地方中部、根室北部、弟子屈です。参加者は昨年より多い73名、のべ198人でした。

＜タンチョウ標識調査＞

＊2024年6月9日に釧路市内の「わっと」で事前勉強会を実施しました。十勝、釧路、根室、オホーツク地方で予備調査を行なったのち、標識調査は6月22日より7月15日までの計13日間行いました。調査には61名、のべ172人が参加してくださり、22羽のヒナを捕獲し標識をつけて放鳥することができました。標識個体の確認情報の収集は通年で随時行なっています。ヒナを捕獲した際に採取した血液と糞のサンプルは、RCCメンバーである酪農学園大学の寺岡研究室に送られ、性別判定、遺伝子系統の分析、餌分析の資料となっています。また、糞は釧路市動物園の獣医師にも提供し、寄生虫の感染状況の研究に協力しています。

＊調査の参加者及び協力者への御礼として、9月に発行しTKGニュースNo.77を、お送りしました。

＊現在使用中の400番台の足環の在庫が残りわずかとなったため、環境省と協議し次年度以降の調査用に500番台の足環を新たに100個発注しました。

＜大陸と北海道とのタンチョウの遺伝子解析＞

大陸個体群と北海道個体群の遺伝子組成を比較するための事業です。北海道各地で収集したタンチョウの羽から抽出されたDNAと、標識調査の際や収容個体などから採取したサンプルなどを使い、酪農学園大学の寺岡教授が分析を行っています。今年度は道東・オホーツク地域で捕獲・標識したタンチョウのヒナと保護収容個体の一部等の遺伝子型を解析しました。この結果についてはAnimals 2024, 14(11), 1633に Possible Shifts in the Genetic Diversity of Red-crowned Cranes (Grus japonensis) in Hokkaido, Japan: Indications of Continental Gene Flow :Wenjing Dong, Kai Tomita,Akira Sawada, Makoto Hasebe, Masako Inoue, Kunikazu Momose, Tatsuro Nakamura, Hiroki Teraoka *、及び本誌52号(大陸由来のタンチョウ遺伝子はすでに北海道集団に広がり始めている：酪農学園大学獣医学群　寺岡　宏樹）で報告されました。

★保護・保全活動（タンチョウ保護に関わる機関・施設との連携及び受託事業）

＜タンチョウの生息地分散＞

＊越冬個体が釧路地方に集中しているタンチョウを分散させることを目的として実施しています。

＊三大給餌場での給餌量削減の影響評価について、環境省からの委託を受け、過去のデータとの比較・分析を行いました。

＊宮城県丸森町で活動する「タンチョウ復帰を考える会」のメンバーと打ち合わせを行い、同会関係者の釧路地方視察に同行しました。

＊北海道北広島市に新しく結成された「きたひろタンチョウ見守る会」のメンバーを訪ね、今後の活動に協力していくことについて話し合いました。

＜鳥インフルエンザ監視活動＞

今秋も鳥インフルエンザに感染死したタンチョウが、10月22日に標茶町虹別で1羽、続いて11月1日に清里町札弦で1羽、遺体で確認されました。感染の拡大が危ぶまれたため、昨年と同様に生息地周辺地域の巡回監視を強化したほか、日頃タンチョウの情報交換等で協力関係にある団体・個人に、鳥インフルエンザ監視

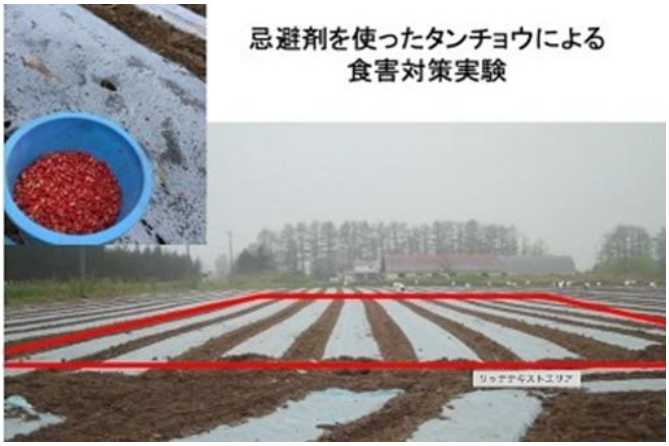
巡回の協力を依頼しました。また、大規模給餌場近くのねぐらに野外カメラを設置し、3月末まで連日カメラ画像による監視を続けました。監視対象地区は、釧路市中音別の音別川、釧路市阿寒町の阿寒川と舌辛川、標茶町の釧路川です。幸いなことに12月以降、タンチョウの鳥インフルエンザの感染は確認されませんでした。

＜中標津俵橋湿原ゆめプロジェクト＞

今年度も中司牧場からデントコーンを提供していただき越冬期のニオを2基作成しました。１基はトウモロコシの茎を使った従来型のニオで野外カメラを設置し、飛来するツルの監視を3月まで行いました。もう1基のニオはシカによる盗食の防止策をとった新型で、トウモロコシの茎は使わず餌バケツの周囲を金属杭で囲いました。金属杭の間隔をせばめてシカは入れずツルの頭は入るように設計しました。

今冬、俵橋湿原のニオに来たつがいの１羽に足環が付いていました。またこれとは別のヒナをつれた家族と、さらに足環のない第３のつがいが現れ、少なくとも2つがい・1家族がニオに来ていることが確認できました。旧来型のニオには昨年度同様に設置後すぐにシカが付いてしまったため、積雪後にシカが来なくなるまでブルーシートで覆って食害とニオの破壊を防ぎました。新型のニオは積雪後にタンチョウの利用が確認されました。

今年度は３月以降もニオを撤去せず、中林牧場の協力をいただき、春のデントコーン畑の食害を減らす実験をおこないました。ニオ周辺にトウモロコシ粒を撒いて、タンチョウを誘引するとともに、ニオが近接するデントコーン畑で忌避剤を使用した試験区を作り、野外カメラで監視しました。その結果、畑へのタンチョウの侵入はごく僅かだった一方で、デントコーンを撒いて誘引したニオ周辺には最大10数羽のタンチョウが飛来し、実験には一定の効果が認められました。



＜キナシベツ湿原プロジェクト＞

キナシベツ湿原を愛する会が行っているフィールドアシスタントの研修活動に協力しました。

★教育普及活動（タンチョウその他ツル類の保護に関する教育普及事業）

＜タンチョウその他ツル類に関する講演・講習会・ポスター展示＞

＊標識調査及び総数カウント調査の際、事前の勉強会を開いてこれまでの調査の結果と分析結果の一部について発表しました。

＊2月15日に、NPO法人サロベツ・エコ・ネットワークと共催の「報告会：サロベツのタンチョウとチュウヒ」にて、当会の百瀬と住吉がオンライン講演をしました。

＊3月22日、北海道大学で行われた環境省主催のタンチョウ再発見から100年記念事業 「タンチョウとの共生を考えるシンポジウム ～道央に舞い戻るタンチョウ～」において、理事長がパネルディスカッションに登壇しました。

★提言及び情報発信（タンチョウその他ツル類に関する提言及び情報発信事業）

＜提言＞

＊北海道開発局帯広開発建設部、同釧路開発建設部の事業について、北海道根室振興局農地課、同釧路総合振興局農地課が予定している事業について、釧路市の上水管埋設工事について、タンチョウの生息に悪影響を与えないための注意事項についてコメントしました。

＊釧路湿原自然再生協議会の本会議と小委員会に参加しました。

＜会報の発行・ホームページ制作等＞

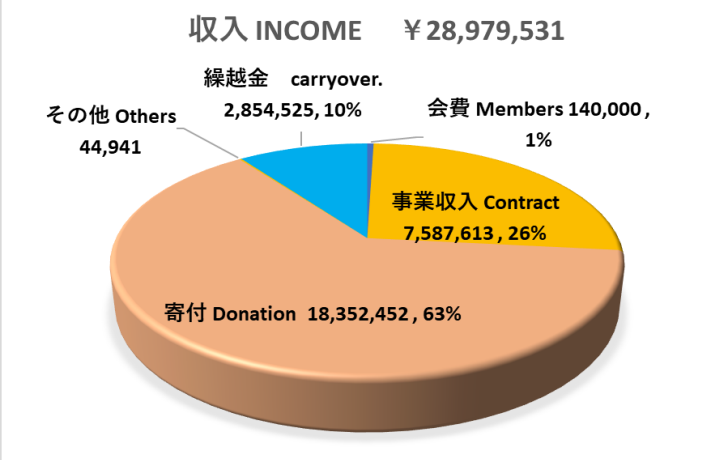
＊会誌「Tancho」第52号を2024年8月に、第53号を2024年12月に発行しました。また、2024年5月にTKGニュース76号、9月に77号を発行し標識調査および冬期総数調査の参加者、標識鳥の情報提供者ほかに送付しました。

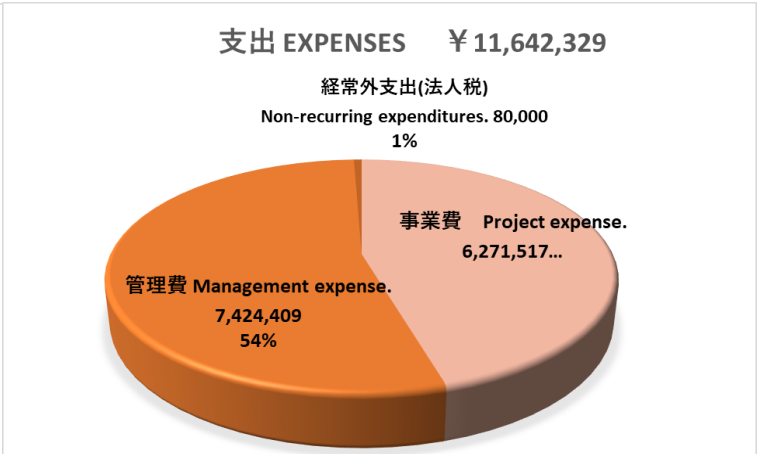
＊ホームページの日本語ページWhat's New!コーナーを年度内に14回更新しました。また「主な活動」の掲載情報の一部を更新しました。
＊Instagram、Facebookを通じて、タンチョウと生息地の状況、RCCの活動を発信しました。

★ 国際協力活動 （アジアに生息するツル類保護に関わるネットワーク推進事業）
＜国際タンチョウネットワークへの参加・協力＞
国際タンチョウネットワーク（IRCN）の活動に協力し、海外に生息するタンチョウとその他のツル類の生息状況の情報を収集しました。IRCNによる2023-24年冬の集計結果は前年とほぼ変らない5000羽弱でした（Results of the International Red-crowned Crane Censuses in Winter 2023/2024：Y.S. Momose, K. Lee, K. Momose, F. Qian 2025, CWGE Newsletter, #19, 2025：89-90）。結果の一部を会報、ホームページ等で紹介しています。

＜世界のツル関係者との交流及び情報交換＞
韓国から来釧した自然保護団体関係者への対応、アメリカのICF関係者との交流等を行いました。

★ その他の活動（法人の目的を達するための事業ほか）
＜活動資金の調達、等＞
・釧路湿原周辺部で計画された太陽光発電の候補地で、踏査、定点観察を併用したタンチョウの生息状況調査を行いました。
・2024年6月25日より8月9日までクラウドファンディング「タンチョウと私たちの未来のために普及・啓発用の本をつくりたい」を実施し344万円の支援をいただきました。この資金をもとに編集を進めており、次年度の早い時期に出版して教育普及活動に活用します。





サロベツ湿原で発信機をつけた429の情報が届きました

429の足輪を付けたタンチョウは2021年11月22日にサロベツ湿原で標識した個体です。標識放鳥した時には単独の亜成鳥で性別は雄です。翌2022年10月24日に再びサロベツ湿原でつがい相手と一緒に捕獲され、GPS発信機が装着されました。429のGPS発信機による位置情報は2025年8月31日現在まで、2年10ヶ月にわたってほぼ途切れることなく得られています（会報48号参照）。2024年の429の繁殖期の位置情報は、サロベツ湿原北端に近いサロベツ川沿いで小さな移動を繰り返していました。つがい相手はいましたが繁殖活動はしていなかったと思われます。429が推定5歳となる2025年の繁殖期はサロベツ湿原南西端に近い、海岸樹林帯中の湖沼群の中に位置情報がまとまって取れていました。営巣していた可能性があり、繁殖成功が確認されれば、日本で初のGPS発信機を装着したタンチョウの繁殖記録となります。

左が429のリングを付けた個体（国道オロロンライン沿いの牧草地で）望月 寧那 （NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク） 撮影

そこで、サロベツ・エコ・ネットワークの望月さんに現地確認をお願いしたところ、残念ながら429はつがいの2羽のままでヒナは連れていませんでした。

また望月さんから、今年のサロベツ湿原地域では、北部の兜沼沿岸で２家族、稚咲内で1家族が確認されているとの情報をいただきました。来年は429の繁殖成功を期待をしたいと思います。

イッキュウさん（標識番号193）の生涯

今年2025年1月23日に越冬地の幕別町でイッキュウさん（標識番号193）が事故にあい死亡しました。このタンチョウは2013年生まれのメスで、営巣地の近くの鶴居村中幌呂のデントコーン畑で足環をつけられました。イッキュウさんは生まれてから死亡するまでの11歳8ヶ月間、北海道内を広範囲に移動したデータが集められ、初めて一羽のタンチョウの生涯が細かく追跡できた貴重なツルでした。他の野生の渡り鳥の追跡のケースと比べても、ここまでの情報が集められた例はありません。大元となるデータを集めてくださったのは、繁殖地の枝幸町で熱心に観察と情報収集を続けられた村山良子さんと越冬地の幕別町で興味を持ち、毎年の無事の出会いを楽しみにしてくださっていた西尾峰明さんでした。また、他にもたくさんの方々がイッキュウさんの観察情報を事務局に寄せてくださり、その動向を見守ってくださいました。皆さまのご協力がなければ、ここまでの情報を集めることはできませんでした。この場をかりてお礼申し上げます。

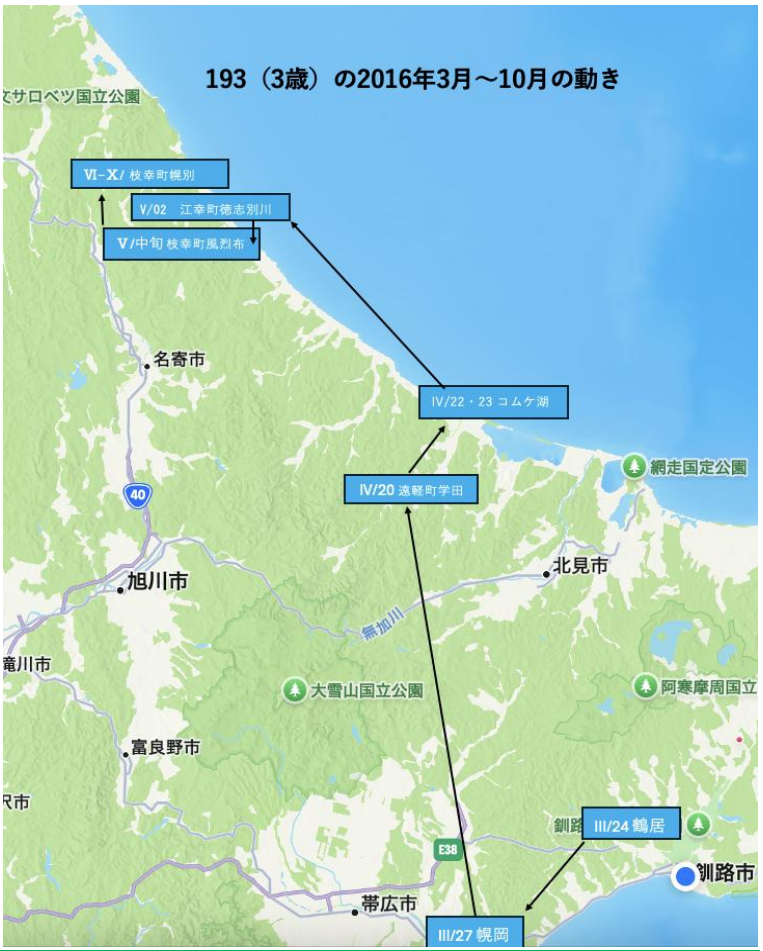
それでは、イッキュウさん（以下、193）の記録をご紹介します。

独り立ちからつがい形成まで：親と別れて広範囲を移動、つがい相手とオホーツクへ

193は、最初の冬を両親と出生地の鶴居村中幌呂で越冬し、2014年春に親と別れると、満１歳と２歳(2015年)の秋までは弟子屈町（釧路川中～上流域）ですごしました。おそらく2歳の冬も同地域で越冬したと思われます。2016年3月末に親と別れてから初めて鶴居村に姿を見せましたが、3日後には十勝地方の豊頃町幌岡に移動しました。そして満3歳となる同年4月にオホーツク地方の遠軽町学田、コムケ湖に現れました。この頃からつがい相手と行動を共にするようになり、コムケ湖で交尾が確認されました。

つがいで定住地を探す：枝幸町に定着するまで

コムケ湖で交尾行動が確認された9日後の2016年5月2日、193はつがい相手と2羽でオホーツク沿岸を北上し、枝幸町の徳志別川に現れました。これは枝幸町でタンチョウのつがいが確認された初めての記録となりました。しかし確認地周辺には営巣できそうな湿地がないため、つがいが移動してしまうのではないかと心配されましたが、その後、193のつがいは9月まで幌別川や周辺の河川や農耕地など枝幸町内をあちこち移動し、10月3日から10月23日まで、幌別川沿いの下幌別にとどまりました。



繁殖地と越冬地：オホーツクから十勝へ、その移動経路は？

下幌別の牧草地での2016年10月23日の確認を最後に約２ヶ月半の間、193のつがいの足取りは途絶えていました。ところが、翌年(2017年)の1月9日、193のつがいが十勝川沿いの幕別町札内の牧場横の畑で確認され、春までそこにとどまりました。

繁殖地から越冬地までの直線距離は約220kmになります。

この距離を193のつがいはどこを通って移動したのでしょうか。それを考えるのに、サロベツ湿原で発信機を付けたタンチョウ426，429のGPS情報（本誌記事参照）が手掛かりになりました。429は193と同じ繁殖開始前の若鳥でした。そして193のつがいが翌2017年秋の移動期に置戸町で確認された情報もあったので移動ルートを推定してみました。193のつがいは幌別川河口付近からオホーツクの海岸線に沿って紋別市まで南下した後、湧別川あるいは常呂川に沿って内陸に入り、山を越えて十勝平野に移動したようです。

しかし、移動だけならばこれほどの日数はかからないはずです。429は繁殖地から越冬地への移動途中に興部川で2ヶ月強(69日)滞在していました。193たちが枝幸町から幕別町で発見されるまではそれより少し長い日数(78日)でした。193たちが移動途中にどこかの河川で長期滞在していた可能性が十分考えられます。

初繁殖そして繁殖成功

満4歳となる2017年4月12日、193のつがいは前年に滞在した枝幸町下幌別に戻りました。地元の村山さんが到着直後に発見し情報をくださったので、春の移動には21日かかったことがわかりました。426,429は３月にはサロベツ湿原に戻っていたので、それに比べると少し遅い到着でした。5月10日早朝、ヨシ原の中で「１羽でこちらを注視したり羽繕いをしてその場からは動かずにいた」様子が観察されました。営巣した可能性があります。翌2018年4月下旬にも同じヨシ原で営巣していたようですが、ヒナは出ず8月以降はつがいだけで行動していました。

193が下幌別に来てから3年目になる2019年5月9日に巣上の卵がドローンで確認され、さらに5月22日にはヒナ2羽が目撃されました。6月中にヒナは残念ながら1羽になってしまいました。村山さんはご自身だけでなく、193家族が立ち寄った牧場の方とも協力して下幌別での観察を続けられました。

193のつがいは、2018年から2021年まで3年連続で繁殖に成功し、2023年までに計4羽のヒナを育てました。

193の越冬地のねぐらを調べる

越冬期の193は幕別町の西尾さん、音更町の山田さんの情報で、193は越冬地の幕別町と十勝川を挟んでその対岸となる音更町で、つがいや若鳥グループと一緒に目撃されていました。193の越冬地は2017年1月にRCCが行った越冬数調査で初めて7羽の小群を確認してから、毎年越冬するタンチョウが増えていった新しい越冬地でした。193は枝幸町で新しい繁殖地を見つけただけでなく、十勝でも新しい越冬地をみつけたパイオニアでした。

この新しい越冬地でのタンチョウのねぐらを確認する調査をしました。タンチョウは十勝川の堤防を直角に横切って中洲にある林の奥に消えていきました。そこは地元の鳥関係者が相生中島と呼んで注目している場所でした。札内川と帯広川が一緒に十勝川に合流し、いく筋もの流れや水たまり、河畔林などが入り組んだ広い河川域で、その幅は1.6km程もあります。

十勝川本流を挟んで相生中島上流側に隣接している音更町下士幌側には、十勝川下士幌樋門から流れ込む小さな不凍河川が合流しています。山田さんによれば、この川は浅くて凍らないためか、冬もザリガニや小魚も多いとのことでした。現地調査ではタンチョウが索餌のために歩き回った足跡の他、ねぐらと思われる場所には多数の足跡と羽づくろいで落ちた羽毛、糞などが見つかりました。堤防下の河畔林と十勝川の本流から離れた帯状の小高い砂丘に挟まれ、下流は開けた十勝川につながっていて、この場所はタンチョウの家族が越冬するのに理想的なねぐらでした。

幕別町側には牧場や畑という好適な餌場があり、十勝川にはねぐらとなる豊かな自然があるのを見つけた193は、タンチョウがどのようにして越冬地を見つけているのかを私たちに教えてくれたように思います。

枝幸町の牧場での193

つがい相方の失踪(死亡？)とその後の193

2022年4月1日、193は例年の通り枝幸町下幌別につがい相手と2羽で戻りました。幕別町札内での最終確認記録は3月20日でしたから、11日あるいはそれ以短の移動日数となります。その後、村山さんが営巣地付近でつがい相手

のオスの体調がおかしいことに気づきました。そして夏にはつがいのオスがケガにより死亡したようで、8月1日には193は１羽になってしまいました。その後、193は10月10日頃まで１羽で下幌別にいました。さらに10月14日の枝幸町音標で193と思われるツルが観察されましたが、1羽のままでした。

ところがその14日後の10月28日に、193は突然生まれ故郷の鶴居村に現れたのです。そして11月6日まで鶴居村下雪裡のデントコーン畑にいましたが、2日後の11月8日朝、今度は湧別町の東の畑に現れました。鶴居村での193の最終確認時間が14:35でしたから、おそらく193は前日の11月7日の夕方までには湧別町に戻っていたと考えられます。

湧別町の畑に1羽でいた193

ちょうどこの時にサロベツ湿原の標識調査へ行っていた私(百瀬)と住吉さんは、釧路への帰路の途中で湧別町に移動した193に出会いました。193は収獲後の耕した畑に1羽で立ち、比較的近くの農道に停めた私たちの車を警戒することもなく、また200mほど離れた隣の畑のタンチョウのつがいを気にすることもなく、反対方向の山の頂に向かって鳴いていました。コンタクトコールといわれる仲間を呼ぶときの鳴き声でした。もちろんその呼びかけに答える声はなく、その様子を見ていた私たちが少しセンチメンタルな気持ちになったことを覚えています。その後の193の確認記録はなく、12月11日に1羽で幕別町札内に戻ってきた193を西尾さんが見つけました。私たちが湧別で出会った後の1ヶ月間、193はどこで何をしていたのでしょうか。ずっと1羽で消えてしまったつがい相手を探していたのでしょうか？

2022-23年冬の越冬地でも193の様子は、いつもと違っていました。前年まで3年続けて家族だったのが、今冬は１羽になってしまったことが影響したのでしょう。観察記録は１羽でいたり、群れの中にいたりしていました。そして十勝での最終確認は1月23日でこれ以降の冬の情報はありません。前年は3月まで幕別町にいました。しかし1月には2羽で観察されていたので、つがい相手と一緒に枝幸町に戻ってふたたび繁殖することを期待していたのですが、193が5月4日に枝幸町現れたときは1羽にでした。その年は12月4日まで枝幸町にいましたが、ずっと1羽のままでした。2023-24年の幕別町の越冬地でも3月20日の最終確認日まで193はずっと1羽でした。

枝幸での再出発、そして幕別での事故死

2024年4月28日、193は枝幸町で1羽で確認されました。しかし8月13日には193につがい相手ができ、2羽で協力して他のつがいと牽制しあっているのが観察されました。そして枝幸町での最終記録になった12月7日までは2羽で観察されました。この年は5日後の12月12日に新しい伴侶を連れた193が越冬地である幕別町にこれまでと同じように戻ってきたのです。2025年1月23日午後13:30、西尾さんが元気な193のつがいを撮影しました。ところが同日の15:00、西尾さんが撮影した場所から100メートル離れた道路の脇で倒れ、立てずにもがいている193が発見されました。通報を受け環境省帯広事務所のレンジャーが、すぐに収容に向かいましたが、見つけた時にはすでに息絶えていました。わずか1時間ほど間に、193は事故にあい死亡してしまったのでした。

事故にあう直前の193とつがい相手

193のが広げた人の輪、そして193が枝幸町博物館に収蔵されました

環境省から193死亡の連絡が入り、この悲しい知らせをこれまで情報提供してくださった枝幸町の村山さんと幕別町の西尾さんほか、協力してくださった皆さんに伝えました。

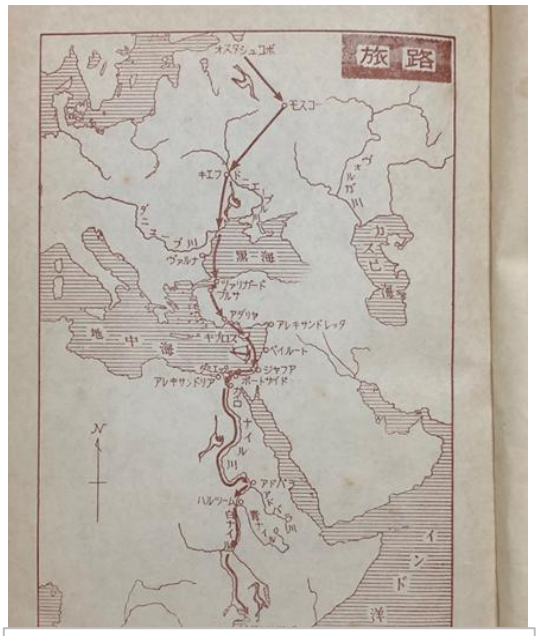
そして村山さんと一緒に枝幸町で193を見守っていた枝幸町博物館の立石さんから連絡がありました。193は博物館の標本となって枝幸町に戻ってくることになったのです。

これまでの193の観察記録を調べると、51名以上の方が情報を事務局に寄せてくださり、その記録件数はのべ160件を超えています(枝幸町だけでも22人)。これだけの多くの方々に興味を持っていただき、また193の動向を注目してくださいました。さらに、鶴居村から始まった193の足跡は、弟子屈、豊頃町、遠軽町、湧別町紋別町、枝幸町、置戸町、幕別町、と北海道東部～北部の9市町村に及びます。各地での記録は、193やその家族がそこで何をしていたかを知る資料として大きな意味があります。

枝幸町に標本として帰ってくる193は、これらの多くの資料とともに活用されることになります。
193は出生から死亡まで、沢山の人の観察記録によってその生涯を追うことができた初めてのタンチョウです。他の鳥類の記録でもここまで集められたものをみたことがありません。
枝幸町で初めて繁殖したタンチョウの193は、今度は町の貴重な自然史の記録として枝幸町博物館に残ります。広く町民に愛されてほしいと願ってやみません。

本のご紹介～イッキュウさん物語の続きとして　百瀬邦和

本紙で紹介したイッキュウさんの物語を整理するにあたって、私が真っ先に思い浮かべた本、1957年に日本語訳が出版された「鶴は南へ飛ぶ」(カラージン 著，鈴木 秀男 訳)をご紹介したいと思います。



カラージン「鶴は南へ飛ぶ」の渡りのルート

この本は、ヨーロッパロシアからウクライナ・黒海・アナトリア半島(トルコ)・地中海を通ってアフリカまで旅をするツルの話です。「ニルスのふしぎな旅」のツル版とでも言えるでしょうか。この本の日本語版に序文を寄せている中西悟堂(日本野鳥の会創設者)は本書を「豊かな構想のロマンである」と評し、「詩に充ちた動物文学の一ジャンルで、その哀調を含んだ、清潔な、しかも雄渾な、全篇の調子は、どこか気高い音楽を想わせる透明で美しい味わいである。」と表現しています。

実は、この本の原著は前世紀（1900年代）初頭のロシア革命の前に書かれたとされています。ところが、驚かされたのは冒頭に「旅路」として描かれた渡りのルートは、現代の様々な機器を使った標識調査で解明された渡りのルートと驚くほど似通っていたことです。おそらく、ずっと昔からツルの渡りをヨーロッパの人々はよく知っていて、渡りの時期は暦のように人々の暮らしの一部となっていたという証なのかもしれません。

標識調査で分かった実際のツルの渡りのルート
Leito,et. 2014 News.CWGE 13, 2014より

私にとってこの本は特別な思いいれがあります。私が日本野鳥の会の研究誌であるStrixに短いレポート「北海道のタンチョウ保護の現状」(1983)を発表し、本格的にタンチョウに関わり始めた頃、尊敬する先輩が、彼女にとって宝物だったはずのこの本を、私に贈ってくれたのです。本には当時小学生だった先輩へお母さんからの署名が残っています。

イッキュウさんが繋いでくれた沢山の人たち、そしてイッキュウさんの歴史を地元の歴史として守っていこうとする枝幸町の方々が、北海道に新たなツル文化を紡いでくれるでしょう。

＜連載＞　鳥と自然と人　最終回　　湿地とインフルエンザ

石　弘之　（本会顧問）

Birds, Nature and people #22

すべてのインフルエンザは、元をたどるとカモ類などの水鳥の腸管内に潜むウイルスが原因だ。カモ類はシベリアなどの北極圏の水辺や沼で繁殖し、年に2回湿地で餌をとりながら移動する。渡りの途中で、フンといっしょにウイルスをばらまいていく。

インフルエンザの流行が、近年になってなぜこれほどまでに猛威を振るっているのだろうか。カート・ヴァンデグリフトら米ペンシルベニア州立大学のグループは、湿地の減少に原因があるとみる。世界的に湿地が埋め立てられて、農地・宅地・工場用地などへ転換されている。

ラムサール条約事務局は、過去40年間で世界の湿地の54～57%が失われたと警告している。森林破壊の３倍以上の速度で消滅しているという。世界自然保護基金（WWF）は、湿地に生息する淡水動植物の個体群の76% が失われたと推定する。

欧州や北米では保護運動によって湿地消失の速度が落ちてきたが、依然としてアジア諸国では破壊がつづいている。たとえば、インド・カシミール州スリナガルには約300平方キロもある巨大湿地があったが、水田や宅地に転用されて半減してしまった。

日本では、2000年の時点で存在する湿地は約821平方キロ。明治以降60％も減った。環境省が2016年4月に発表した調査結果によると、対象になった823カ所の湿地のうち、524カ所が「悪化傾向」にあるという。ヴァンデグリフトは、水鳥が利用できる湿地は今後も地球規模で大きく減少すると予想する。ということは、インフルエンザの流行もつづくということだ。

（今回をもって、この連載を終わります。長いことご愛読いただきありがとうございました。）

石さん、長い間連載してくださり、ありがとうございました。石さんには世界中を回ってこられた長く幅広いご経験、さらに鍛え上げられた取材力を活かして、鳥と自然と人にまつわるエピソードを紹介していただきました。今後は私（百瀬）が関わってきた世界のツルや希少種、絶滅鳥を題材に、石さんのくださったテーマに取り組みたいと考えています。

＜活動記録＞（2024年12月～2025年3月）

12月3日　　北海道横断自動車道（阿寒～釧路）タンチョウ保全対策検討会に出席(百瀬)
12月6日～8日　ディズニー財団のJason Fisherさんのタンチョウ生息地現地視察案内(百瀬K, 百瀬Y)
12月11日～13日　ICFから紹介のあった作家Paul Bogardさんへの対応(百瀬K, 百瀬Y)
12月13日　　運営会議(8名)
1月5日～10日　来釧したICFの関係者2名への対応(百瀬K, 百瀬Y)
1月7日～14日　来釧したArchibald理事とICF関係者への対応(百瀬K, 百瀬Y)
1月11日　　カウント調査勉強会(於：わっと　冨山、百瀬)
1月17日～2月4日　カウント調査開始
1月27日　来釧したICFの関係者3名への対応(百瀬K, 百瀬Y)
1月28日　来釧したICFの関係者2名への対応(百瀬K, 百瀬Y)
2月7日　釧路湿原自然再生協議会第１回　再生普及・地域づくり小委員会に出席(百瀬)
2月8日　鶴居村で開かれた「タンチョウ再発見から１００年記念フォーラム」に出席(百瀬)
2月12日　環境省　令和6(2024)年度第2回タンチョウ生息地分散施策検討WG会議に出席(百瀬)
2月14日　釧路湿原自然再生協議会 第１回土砂流入・水循環小委員会に出席(百瀬)
2月15日　サロベツ・エコネットワーク報告会「サロベツのタンチョウ・チュウヒ」にweb参加　(百瀬K, 住吉)
2月17日　釧路湿原自然再生協議会第１回 湿原再生・河川環境再生・森林再生小委員会に出席(百瀬)
2月20日　キナシベツ湿原でFA活動の参加学生にレクチャー（百瀬）

＜活動記録＞（2025年4月～8月）

3月4日　ディズニー財団Jason Fisher、ICFスタッフらと新プロジェクトについて
Web打ち合わせ(百瀬K, 百瀬Y)
3月7日　第31回釧路湿原自然再生協議会に出席(百瀬)
3月7日　運営会議(5名)
3月13日　釧路市議会民生福祉常任委員会「釧路市自然と太陽光発電施設の調和に関する条例制定に向けて」
3月22日　環境省のタンチョウシンポジウムにパネリストとして出席(於：北海道大学理学部　百瀬)
意見や要望」意見交換会に出席(百瀬)
3月24日　IUCN Red List見直しに向けたWEB会議(百瀬K,百瀬Y)
4月10日　「(仮称)釧路市自然と太陽光発電施設の調和に関する条例」の制定に向けた検討会議(百瀬K)
4月18日～23日　十勝地方の飛行調査及びドローン等による繁殖状況調査（猪股、冨山、百瀬）
5月15日　会計監査(住吉、星)
5月16日　運営会議(4名参加)
5月24日　2024年度第1回理事会開催(於:事務所―Web併用)
5月25日　2024年度定例総会開催(於:コアかがやき)
6月7日　標識調査勉強会(於:わっと 冨山,百瀬)
6月9日　標茶町での傷病タンチョウの放鳥に同行(百瀬K)
6月13日　R7年度タンチョウ情報交換会に出席・公演(於:池田河川事務所　百瀬K)
6月21日～７月19日　標識調査実施
7月1日　標茶町で放棄巣でのタンチョウの卵の回収(環境省)に同行　(百瀬K)
台湾研修生への公演(於:釧路市動物園　百瀬K)
7月7日　台湾研修生の現地ツアーに同行し、釧路湿原の自然再生事業、タンチョウ標識調査について解説
(釧路市動物園、釧路開建治水課と協働)
7月14日　わっと主催の台湾研修生の報告会に参加(於:わっと)
7月30日　北海道ワイナリー協会の研修会で講演(於:道の駅 三笠　百瀬K)

＜　会 員　＞　（　8月 31日　現在　）
会員数：150名（運営会員：24名、個人サポート会員：126名（卵 80、ひな 43、若鳥 2、成鳥 0、終身 1）

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter　TANCHO
Fifty-forth and fifth issue　September, 2025

＜表紙写真　Cover photo＞
刈り取り後のデントコーン畑に
家族でたたずむ（豊頃町）

撮影者：冨山　奈美

認定特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ

〒 085-0036
北海道釧路市若竹町9番21号
Tel/Fax 0154-22-1993
e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp
URL: http://www6.marimo.or.jp/tancho1213